阿波・淡路の水軍と城郭（海城）

山上雅弘

はじめに

鳴門海峡を挟んで南北に位置する阿波国・淡路国には、鳴門海峡の往来を始め瀬戸内海航路や南海航路など畿内と西国を結ぶ重要な航路が交差する。戦国時代には、これらの航路の寄港地となった港津に多くの海城が築かれた。

隣接する両国の戦国時代は細川氏から三好氏へと支配者が変遷するなど共通する部分が多いものの、城郭の分布や構造については相違点も見られる。このため本稿では、国ごとに歴史的な概要および海城についての紹介を行なうこととした。なお、本稿では海浜、沿岸ないし島嶼部に立地するものを、近年の研究動向に従って海城と呼称しておきたい。

１．阿波の海城

（１）歴史的経緯[1]

戦国時代後半の阿波では阿波守護細川氏が支配したが、家臣であった三好氏が台頭し、天文 22 年（1552）に三好実休が阿波守護細川氏之を自刃に追い込み、三好氏が実質的な阿波の支配者となる。その後、永禄 5 年（1562）3 月、実休が久米田の合戦で討死すると、長治が継いで篠原長房がこれを支えた。しかし、元亀 2 年（1573）の上桜合戦で細川眞之・三好長治らによって長房が滅亡すると、阿波内部は三好方と反三好方の対立が生じることになる。この時、反三好方であった有力国人の伊沢氏・一宮氏らは細川真之を盟主に長治に対抗した。一方、土佐の長宗我部氏は天正 3 年（1575）に南方に侵攻し海部城を落城させている。そして、反三好方の要請もあって、天正 4 年（1576）には西部の白地城を陥落させ、南・西の 2 方向から阿波に侵攻した。同年 12 月には三好長治が自害し（天野忠幸 2012）、阿波三好家は滅亡する。

翌年、讃岐の十河存保が勝瑞に入り三好方を支えるが、徐々に圧迫され天正 7 年には美馬郡の脇城、那賀郡の牛岐城が長宗我部氏に下る。これにより天正 8 年十河存保は讃岐に退去し、反三好方の一宮氏が勝瑞城に入り、阿波はほぼ長宗我部勢と反三好方によって制圧される。一方、三好方は鳴門周辺の篠原自遁が守る木津城・森志摩守が守る土佐泊城の 2 城に追い詰められた。この 2 城は抵抗を続け天正 9 年には十河存保が阿波に戻るが、天正 10 年の本能寺の変で織田方の支援が頓挫すると、木津城も同年には落城し、土佐泊城のみが最後まで戦線を維持することとなった。

その後、天正 13 年に秀吉の四国攻めが行なわれ、阿波には秀長が淡路を兵站基地として福良から土佐泊に渡海して阿波を制圧した。四国平定後、蜂須賀家政が阿波を拝領し一宮城に入るが、直後に渭津に徳島城を築城して移ると共に、戦国期の城郭を改修して領内に支城を配置した。これらは後に阿波九城と呼ばれた。一方、土佐泊城を長宗我部軍から守り抜いた森志摩守は椿泊に移封され、松鶴城を築いて紀伊水道の要衝を拠点とした。

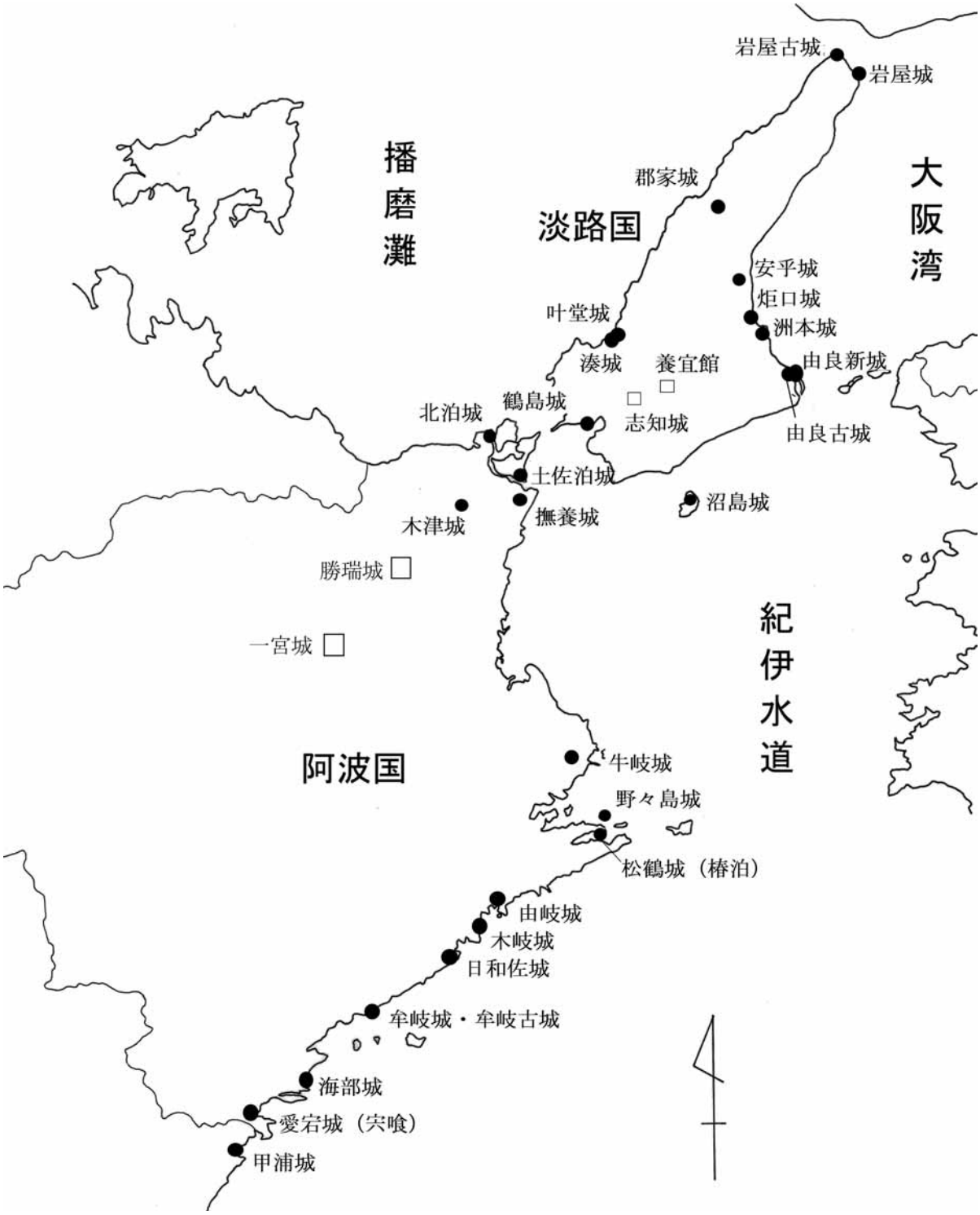

図１　阿波・淡路の海城

（２）阿波の海城[2]

阿波は北方と呼ばれる北部と、南方と呼ばれる南部に大きく分かれる。北方の海城では鳴門周辺の撫養城（岡崎城）・土佐泊城・木津城などが主要なもので、いずれも港津に密接に関わる海城である。一方、南方の主要な海城も港湾と密接に関わる海部城・牛玖城・日和佐

城などが知られる。さらに、椿泊の沖合にある野々島城は海上交通を監視する海城とされる（石井伸夫 2022）。ここでは先ずはこれら主要な海城について紹介したい。

（3）北方の城

撫養城（別名：岡崎城・林崎城、鳴門市瀬戸町北泊）

この城は旧吉野川の支流、撫養川河口部の妙見山に所在する。撫養は「牟夜戸」「撫養津」とも呼ばれ、古くからの要港として知られる。この場所は阿波国内へ通じる撫養街道の起点となる水陸交通の結節点であった。北側は小鳴門海峡東側の出入り口に隣接し、海峡を挟んだ対岸には土佐泊城が立地する。

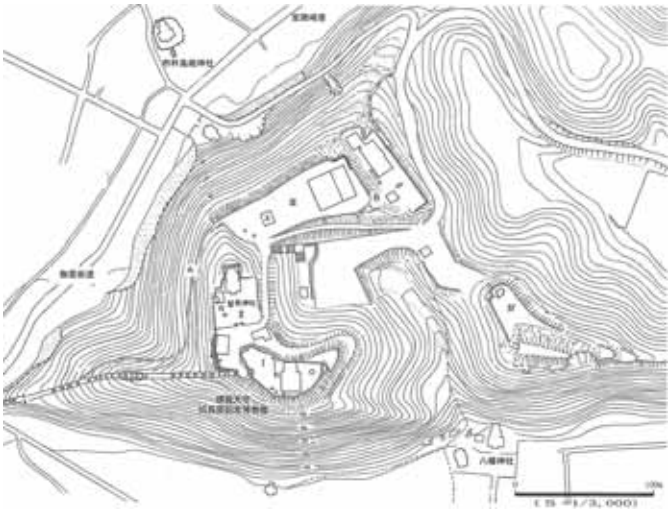

図 2　撫養城縄張図（本多昇氏作成）

城の築城時期は不明だが、戦国時代には小笠原氏から城を譲り受けた四宮氏が城主とされる。四宮氏は天正 4 年（1577）の三好長治滅亡時には長治方であり、同 6 年の十河存保の阿波入国では存保は「阿州撫養の津」に上陸している。ただ、その後の長宗我部方との戦いでは当城は登場せず、北側の土佐泊城のみが史料に見える。

天正 13 年（1585）蜂須賀氏が入封すると「淡州渡海の押さえ」として岡崎城を改修し、阿波九城の 1 つとして益田内膳丞正忠を配した。この時、対岸の土佐泊城は廃城となっているので、四国攻めの時とは逆に岡崎城に機能が集約されたものとみられる。

現在の岡崎城は山頂（標高 61.4m）の本丸に模擬天守、二ノ丸に妙見神社が建つなど改変が著しい。ただし、それぞれの平坦地は城の郭を基礎に拡張したものと思われるので、城の大まかな構造は推定できる。主郭は「太鼓櫓」と呼ばれる曲輪で、北側の曲輪Ⅱには天保年間に建った妙見神社が鎮座する。曲輪Ⅲは東西 95m×南北 33m と広く「千畳敷」と呼ばれた。また、曲輪Ⅴは駐車場となるが、谷央にあって、かつて書院の井戸と呼ばれる水源があったといい、本田昇氏は居館の可能性を指摘する。以上から見ると細部は不明であるが、5～6 箇所以上の曲輪を持つ大規模城郭であったと思われる。

土佐泊城（鳴門市鳴門町土佐泊浦）

天文年間以降、水軍の森氏が土佐泊を拠点としたとされる。森氏は三好方として水軍の一翼を担い、畿内進出などに活躍した。一方、土佐泊城は前述の通り秀吉の四国攻めまで維持され廃城となった。

この城は小鳴門海峡東端の出入口を押さえる場所に立地するもので、東側の新城と西側の古城からなる。新城の山頂からは東に沼島、北側に鳴門海峡や淡路島福良の鶴島城を遠望できる。城跡は開発によって改変されるが、昭和 56 年 3 月の本多昇氏の縄張図からおおよその構造が把握できる。

新城は標高 76mの本丸が南北にかなり広い曲輪であったと思われるが、現在は大半が削平されてしまっている。これを起点に 3 方向に曲輪が配置される。西側の曲輪は山の稜線に位置し、北側は 2 段の曲輪。一方、南側は稜線から派生した尾根に階段状に曲輪を配置する。4 段の小曲輪とやや下って中腹と、岬の突端にも曲輪がある。曲輪を梯郭式に重ねる構造で単純なものといえる。

古城は新城に比べ簡易な構造となるので、この点からは古城という評価は頷ける。山頂の主郭は標高 42m、南北 20m×東西 10m程の小規模な曲輪であるが、前後に南側はやや広い曲輪がある。この 2 つの曲輪周辺が城の中心となる。

新・古の両城を合わせると阿波では大規模な山城といえる。ただ、発達した防禦施設を構築した可能性は低い。

図 3　土佐泊城縄張図（本多昇氏作成）

木津城　（鳴門市撫養町字城山）

永禄期～天正期には篠原自遁が在城したが、天正 10 年（1582）に長宗我部氏によって落城した。自遁は淡路志知城に落ち延び、土佐方に付いた桑野城主東条関之兵衛が入城した。その後、天正 13 年（1585）に羽柴秀長率いる豊臣軍に包囲され、8 日間の籠城の末に開城した（『四国軍記』）。木津城は当時の古吉野川河口にあった港津に所在した。ここは畿内からの船の寄港地で阿波内陸部への要衝であった。

図 4　木津城縄張図（本多昇氏作成）

この城は阿讃山脈から南西に伸びる標高 64mの独立丘陵に位置する。城が立地する山は東西方向に尾根が続くもので、南側の平野方向へは急傾斜となる。山頂の主郭は東西 40mほどの規模だが、内部は昭和 33 年の上水道建設に伴って破壊され、主郭北側下の帯曲輪のみがかろうじて残される。帯曲輪は東-北-西北にかけて主郭に沿って巡る。長さ 60m以上、最大幅 12mの規模で、北辺では縁部に土塁が囲む。また帯曲輪北東側斜面には畝状竪堀をもつ。主郭との間の切岸は 7～8m前後と大規模なもので、帯曲輪も幅が広く大規模である。

平成 15 年の発掘調査では帯曲輪において礎石建物が検出され、戦国時代の遺物が出土するなど、生活痕跡が確認されている。このため、帯曲輪は単に戦闘時の防御曲輪として機能しただけではなく城兵の駐屯場所であったと推測される。

長宗我部軍と秀吉軍による正面戦争の場所となったわりには小規模な山城と評価せざるをえない。歴史的な役割からすると、平野部における構造も視野に検討する必要がある。

（4）南方の城

牛岐城（別名：富岡城、阿南市富岡町内町）

那珂川下流の沖積平野に位置し、桑野川右岸の独立丘陵である城山（標高 20m）に所在する。城がある牛岐は江戸時代には郷町として栄え那珂川の舟運の拠点であった。江戸時代は木材の集積・積み出し港として知られる。

この城は新開氏の拠点で戦国時代後半には新開遠江守忠之（道善）が拠った。天正 3 年（1575）以降の長宗我部氏による阿波侵攻に、新開道善は三好方として長宗我部氏と合戦におよぶなど対峙するが、天正 7 年に香宗我部親康の勧告を受け入れ長宗我部方となる。

図 5　牛岐城縄張図
（辻佳伸氏作成・徳島県教育委員会 2011 より転載）

しかし、天正 10 年、信長の四国攻略軍の先鋒として三好康長（咲岩）が阿波に入ると阿波の多くの武将と共にこれに従い、再び三好方として戦った。

天正 10 年に本能寺の変で信長が横死すると長宗我部方は攻勢に転じ、新開道善は丈六寺（徳島市）で謀殺され、牛岐城には長宗我部方の香宗我部親泰が入るが、天正 13 年の羽柴秀吉の四国平定によって長宗我部氏は土佐に撤退した。その後、蜂須賀氏の支城となり、後に阿波九城に数えられた。細山帯刀（後の鹿島主水正政慶）が入り、城名を『富岡城』と改めたが、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となった。

城山は平面が瓢箪型で中程が鞍部となる山容であったといわれ、南側の頂部を御城山、北側を八幡山と呼んだ。しかし、大正 2 年の道路工事によって中央部を分断され、昭和 45 年には公園整備が行なわれ、景観が大きく変貌した。さらに、平成 10 年には城山南側の山頂に産業展示館が建設されるなど、現状では城郭の様子を窺うことが難しくなっている。

『牛岐城絵図』（個人蔵・明和 5 年）によれば御城山を中心に周囲に内堀が巡り、さらに西側に形成された近世牛岐城の城下町を囲んで、北側を流れる桑野川と南側を流れる流路が外堀の役割を果たしたとされる。

産業展示館建設時の発掘調査によって城郭の石垣が検出された。この石垣は隅角部がシノギ積みとなる織豊時代のもので、本丸の周囲を囲んだ石垣の一部といわれ、阿波九城時代の改修が指摘されている。

日和佐城　（海部郡美波町日和佐浦）

標高 61.8mの山頂に築かれた海城である。日和佐川の河口に位置し、日和佐港の中心とは川を挟んだ対岸に立地する。戦国時代に日和佐氏が拠ったとされる（『城跡記』『古城諸将記』）。天正 4 年頃から長宗我部氏の侵攻に伴って徐々に圧迫され、天正 5 年 11 月に日和佐肥前守は降伏した（『香宗我部證文』）。

現在の日和佐城は模擬天守建築に伴って地形の改変が著しく遺構の状況は不明である。小曲輪の痕跡などがわずかに残されると言われるが、詳細はわからない。『海部郡村誌』や「海部郡灘筋目図」などでは 3 段の曲輪があったといわれ、本田昇氏はかつて空堀を巡らせた遺構が良好に残されていたという（石井 2018- a）。

海部城　（海部郡海陽町奥浦・鞆浦、昭和 51 年海部町史跡）

海部城は海部川の河口にある標高 50mの城山に選地する。当時の海部川の河口は城跡の南東を蛇行して流れると共に、城跡の西側にも旧流路があって、城山の周囲は内海と河川に囲まれた島状の地形であったと考えられている（石井伸夫 2021）。

築城は内陸の吉野城を居城とした海部左近将監友光（宗寿）が、元亀年間（1570～73）に進出して築いたという。海部は鞆浦・赤松・奥浦の 3 町で構成され、南方の有力港津として栄えた。14 世紀の『兵庫北関入船納帳』にも登場するなど博の積み出し港として知られた。

図 6　海部城縄張図（本多昇氏作成）

城主の海部氏は阿波国衆の 1 人で海部郡内の有力国人とされる。永禄～元亀頃の当主は海部友光である（『阿波志』）。天正 3 年（1575）海部氏が讃岐の引田に出陣中、土佐の長宗我部元親の侵攻によって当城は落城した（『古将記』）という（ただし『阿州将裔記』は天正 4 年）。落城後には元親の家臣香宗我部親泰をおいた。その後、天正 13 年に阿波に蜂須賀が入封すると、鞆城と改名し阿波九城の 1 つとなった。

城域は南北 300m×東西 250mの規模を持ち大小 14 の曲輪で構成される。基本的に郭を梯郭式に重ねる構造を持つが、南側の郭群は大規模な堀切を挟んで別郭構造となる。

城跡の中心部は主郭（Ⅰ）および南側に小規模な 2 郭、北東方向へ広い曲輪Ⅱを配する。但し、主郭及び北東に隣接する曲輪は第二次大戦中の防空施設が設けられ改変を受けている。主郭は概ね旧状を踏襲すると思われるが、周囲の石垣は新たに積まれたものである。

曲輪Ⅱは城内最大規模を誇り、海部川を眺望できる場所にある。また、曲輪Ⅲから北西へ下る曲輪の前面には矢穴を持つ石垣が残存し、付近には近世初頭の瓦が散布する。石垣・瓦は阿波九城となった段階の改修痕跡と思われる。

松鶴城と野々島城　（阿南市椿泊町東・阿南市椿町野々島）

松鶴城は阿波の海岸線が最も紀伊水道に張り出す椿泊半島の先端、湾内の海岸に面して築かれた。一方、野々島城はこの半島の沖合 300mに位置する。野々島城は戦国時代に築かれ、海上交通の把握に特化した城となる（石井 2022）。

図 7　野々島城（辻佳伸氏作成・徳島県教育委員会 2011 より転載）

松鶴城は天正 13 年、阿波に入封した土佐泊城から移封された森島志摩守が築いた居館で

ある。平成 18 年の発掘調査で居館前面に積まれた豊臣期の石垣が検出された。

野々島城は椿泊半島の沖合 300mの野々島に所在する。単郭構造で主郭は標高 82mの山頂にある。城の規模は南北 90m×東西 50m程で、南側に堀切を持つ。郭は山頂の主郭と西北方向のⅡ郭を中心とする。主郭からⅡ郭へは折れを持つ虎口が構築され、側面に石積みを持つ。また、主郭北東端には櫓台状の高まりが見られるという。小規模な山城であるが主郭周囲に石積みを構築している。この点から中世山城を蜂須賀段階に改修した可能性が指摘されている（石井伸夫 2022）。

（５）阿波の城館概要

以上、阿波の城郭について主なものを概観した。ここからは北方と南方について海城の様相について検討をおこないたい。

先ず、北方では港津に築かれた土佐泊城・撫養城・木津城の 3 城が知られ、この 3 城が阿波の玄関口を支配する拠点城郭であったと考えられる。しかし、土佐泊城や木津城が天正期に秀吉方と反三好方および長宗我部方との争奪の場となったことを踏まえると、最終段階では軍事的な状況に応じた使われ方をしたと思われる。つまり、この騒乱に際して立地では最も拠点城郭にふさわしい撫養城が、両陣営の衝突の中で姿を現さない。土佐泊城と水道を挟んで近接する撫養城は長宗我部方にとっては付城といえるほどの距離にある。このため対岸を圧迫すれば不測の事態を誘発する可能性が高い。土佐泊城側からは水道を超えて兵力を割くリスクがある。つまり、膠着状態となった天正 10 年以降の両陣にとって撫養城の使用にはリスクが伴ったのではないかと思われる。

図 8　鳴門と福良

一方、土佐泊城では古城と新城があったが、古城は眼前の水道や対岸の撫養城は望めるが、鳴門海峡や沼島への視野は余り良好ではない。これに比べ新城は東の沼島、北の福良・阿万などの淡路島方面へは眺望が効く。特に、福良から鳴門に渡海する場合、その動向を土佐泊、対岸の福良（鶴島城）の双方から常時監視できる。一方で南側の鳴門からは土佐泊城の山並みが遮り、その行動に気づきにくい。つまり、土佐泊城を維持する上で新城への築城は淡路との関係において重要であった。このように戦国時代末期の阿波の北方の海城は軍事的な必要によって存廃が決定されていたと思われる。

一方、南方ではリアス式海岸の沿岸に立地する港津に、多くの海城が築かれた。石井伸夫氏はこれらの港津について河口タイプと湾奥タイプがあるとする（石井 2018-ｂ）。河口タイプは海上・河川交通の結節点で物流拠点としての性格を持つ港津で、愛宕城・海部城・牟岐城・日和佐城などの海城が該当するという。湾奥タイプは大きく湾入する海岸地形の奥部に立地するもので、風待ち、潮待ちの機能を持つ港津とされ由岐・浅川・甲浦（高知県東洋

町）などが該当する。そして宍喰と甲浦、海部と浅川、日和佐と木岐・由岐が物流拠点と風待ち・潮待ちの港が隣接してセット関係に築かれていることを指摘する。

これらの中で城郭構造から見ると河口タイプの港津である海部と日和佐がより大きな規模もしくは発達した構造を持っていた。海部城は規模・構造共に阿波最大級の海城である。そして、日和佐城については規模こそ不明であるが、横堀の存在からは少なくともこれらの城郭群の中では進んだ構造を有したと考えられる。また、日和佐城の立地は川を挟んだ町の対岸にあって、町を見下ろす場所にある。低丘陵で町に隣接するイメージの他の海城とは印象が異なる。つまり、南方のこれらの海城の中では海部城・日和佐城が有力城郭として抽出できるだろう。

さらに那珂川の河口近くにあった牛岐城は、戦国時代の構造を知ることはできないものの城山の山容からみると、これも一定の規模を持ったと思われる。さらに、歴史的な面においても天正 7 年まで長宗我部氏と対峙した新開氏の戦いは、戦線を維持できるだけの拠点であった可能性が高い。

従って、南方においては海部城・日和佐城・牛岐城の 3 城が拠点城郭といえそうである。後に海部城・牛岐城は蜂須賀氏の時代にも阿波九城として残されるが、その事からもこれらの城が拠点にふさわしい立地と構造を保有したことが窺われる。

一方、これらとは別に野々島城は、内陸への交通を意識せず海上交通のみに依拠した立地を持つ点で特徴的である。海城の概念は多様で漠然とする点があるが、石井伸夫氏も述べるとおり松鶴城・野々島城は海城といえるだろう（石井 2018-ｂ）。

２． 淡路の海城

（１）歴史的経緯(3)

淡路では永正 16 年（1519）に淡路守護細川尚春を三好之長が滅ぼすと、三好氏が実質的に支配することとなった。ただし、大永 8 年（1528）には炬口城の安宅氏が反乱を起こすなど、抵抗する勢力も存続した。こういった混乱の後、三好長慶の次弟である冬康が安宅氏を継承し、島内の掌握を進める一方、洲本の拠点化を計り、天文 23 年（1554）・永禄 3 年（1560）には同地で会議を行うなど（『細川両家記』）淡路における拠点として重視している。しかし、永禄 7 年（1564）に安宅冬康が兄長慶によって謀殺されると淡路における安宅氏の統率力が低下してゆく。

永禄 12 年に織田信長が上洛し畿内を掌握するが、天正期に入ると畿内は信長方とこれに対立する本願寺や将軍足利義昭などの反織田勢力との対立が深まる。

天正 4 年（1576）頃からは西国の毛利氏が反信長方として淡路岩屋城を占拠し、畿内進出への橋頭堡とする。毛利氏は岩屋に警固衆を派遣し、淡路の菅氏などを引き入れ島内に影響力を持つようになる。これに対抗して信長方も安宅神五郎を淡路に差し向け調略を行なうなどしたため（中平 2020）、淡路は両派の争奪の場となっている。

天正 9 年 11 月に秀吉が淡路を制圧すると島内は織豊政権の勢力下となるが、同時に島内は阿波攻めの兵站基地とされる。天正 10 年 6 月に本能寺の変によって四国攻めが、一時頓挫するものの、この時、淡路の志知城や福良を兵站基地として阿波に救援が送られる。

天正 13 年に秀吉による四国攻めが実施され、阿波へは秀長を総大将として福良に軍勢が

集結し、阿波攻めが行なわれた。これには仙石秀久の配下として淡路勢が加わっている。

この戦いによって阿波は秀吉の麾下に組み入れられ、蜂須賀家政に与えられた。淡路には脇坂安治が 3 万石で入封し、翌年 14 年には三原郡に加藤嘉明が 1.5 万石で入封し志知城を居城とする。豊臣期の両大名は小田原攻め、九州攻め、さらには朝鮮の役で淡路の水軍を率いて従軍している。

加藤嘉明は文禄 4 年（1595）に伊予松前に転封、脇坂安治は慶長 14 年（1609）まで淡路を領国とする。在城期間が長い脇坂は文禄～慶長期にかけて洲本城の改修を進め、近世城郭としてその姿を変貌させた。一方、加藤が在城した志知城は関ヶ原の合戦前後に廃城となり、三原川河口の湊に叶堂城を築いた（『淡路草』・『味地草』）。

慶長 15 年（1610）に淡路は池田輝政三男の忠雄が拝領し、輝政が監国している。この時、洲本城を廃城とし、先ず岩屋を築城して慶長 18 年からは由良城を築城した。ところが大坂の冬の陣後に、備前池田家の池田忠継が没し、忠雄が備前岡山藩を継いだため淡路は幕府によって収公され、大坂の夏の陣後に蜂須賀家に与えられた。このとき由良城が淡路の拠点となるが、後に洲本への移城を幕府へ願い出て寛永 8～11 年（1631～1634）にかけて由良引けが実施された。洲本城は麓の御殿（下の城）を再築して江戸期を通じて淡路の藩庁として維持された。

（2）淡路の海城

淡路島は北側の丘陵地帯が占める津名郡と、三原平野が立地する三原郡の 2 郡からなる。北は瀬戸内海航路が通る明石海峡、南東の海岸線は南海航路の沿岸になる。これらの基幹航路の要港として岩屋・由良が知られると共に、洲本・炬口・湊・福良などが島内からの海運ネットワークの要港であった。ここではこれらの主要港津に築かれた海城を紹介する。一方、南北に長細い地形から多くの港津があるが、その多くには中小の海城が築かれている。

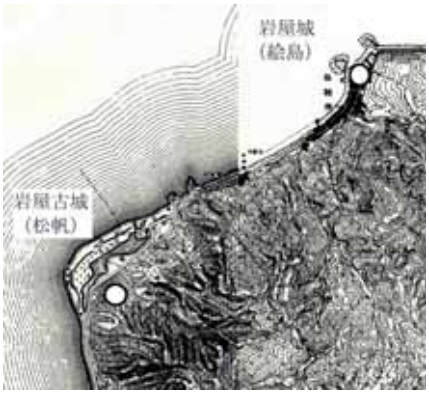

図 9　岩屋城位置図
（明治 19 年陸軍仮製図に加筆）

（3）要港に立地する淡路の海城

岩屋城（淡路市岩屋・松帆）

戦国時代から織豊期までの岩屋古城と慶長 15 年に池田家によって築かれた絵島岩屋城があるとされてきた。さらに岩屋古城は安宅氏の城として築かれるが、天正 4 年に毛利方の拠点となったとされる。その後、天正 9 年（1581）11 月に羽柴秀吉・池田勝三郎（恒興）らによって落城した（11 月 16 日付「羽柴秀吉書状」吉武文書、「信長公記」など）。

図 10　絵島岩屋城（淡路名所図会・兵庫県立歴史博物館蔵）

絵島岩屋城は慶長 15 年(1610）に淡路国が池田輝政領となったことによって築かれ、同 20 年の大坂の

陣の直後まで存続した。この時の築城は徳川方であった池田家が、西国の豊臣方を明石海峡で監視するためのものであった（山上雅弘 2020）。

このように新旧の 2 城があるとされてきた岩屋城であるが立地や構造からみると、これまでの通説には疑問点が多い。ただ、岩屋古城は播磨灘に面した松帆背後の丘陵上にあったが昭和 40 年代の土取によって破壊された。山本幸夫氏によれば削平段が 2〜3 段存在したという。一方、『味地草』の挿絵からも小規模な山城であることが読み取れる。ただこの場所は播磨灘方面を遠望できるものの大阪湾への見通しは効かない。その上、『味地草』の挿絵を見てもわかるとおり、膝下には船溜りがない。つまり、規模や立地、さらに船舶の係留などからみると毛利氏が拠点を置いたという話には疑問が残される。

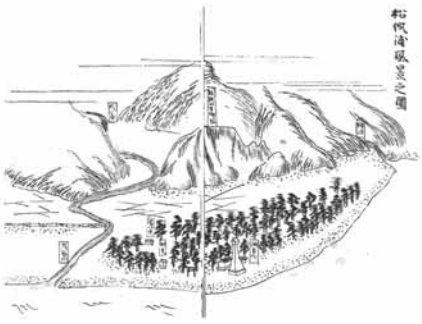

図 11　岩屋古城（『味地草』）

一方、絵島岩屋城の方は長方形を呈する台地が主郭となるもので、南北 150m×東西 70mの規模をもつ（『味地草』）。構造は山頂の本丸、南側に二の丸、北側に三の丸があって、本丸には天守台がある（山上 2020）。そして西側には現在の岩屋港が隣接し、湾に面して市街が広がる。この港は内湾地形のため船の停泊に適している。ただし眺望は大阪湾へは効くが、瀬戸内海方面には適さない。

つまり眺望の点では両者が補う関係となる。これらのことから戦国期の毛利方の拠点として条件を満たすのは、眺望を除くと絵島岩屋城のほうであり、古城は出城と考えるのが妥当であろう。これまでいわれてきた岩屋城の関係は新旧ではなく、絵島岩屋城が本城で、戦国期にのみ岩屋古城が瀬戸内海を見張る出城として機能したと考えるのが妥当だろう。

洲本城（洲本市小路谷）

洲本川の河口には南側に洲本、北側に炬口が立地する。どちらも海岸砂堆後背の内海を港として発達したと思われる。さらに、大阪湾に面する地の利は畿内への玄関口に適しており、三原平野へも利便性がよかった。洲本は元々海岸にあった「沖ノ洲」（「天正年中　淡路諏本町並図」の記載）と呼ばれる砂堆から転化した名称とされ、本来は物部荘の一部であったが、港津の発展と共に独立した地名となった（浦上雅史 2016）。

図 12　洲本城縄張図（西尾孝昌氏作成）

洲本は三好長慶の次弟冬康が養子となり由良と共に拠点とした。天文 23 年・永禄 3 年には長慶兄弟が会議を行なう（『細川両家記』）など、淡路における拠点として機能する。その後の経緯は前述の通りで、最後は寛永 8〜11 年に再び淡路の拠点となる。

洲本城は天正 13 年に入封した脇坂安治によって総石垣構造に改修された。ただし、現在残される石垣の大半は文禄から慶長期のものと思われる。主郭は方形プランで城下側の北辺に天守台および小天守台を持つ。南・西面に虎口を持つが、南側が大手で、枡形構造となる。城域は広大で、主郭及びその周囲の主要郭群（東の丸・山里郭・東の丸二段郭・水の手

郭・籾蔵など）と外曲輪（武者溜り・西の丸・馬屋）からなり、各曲輪に石垣が築かれる。

城下には徳島藩時代の居館（下の城）がある。堀と石垣で囲い、正面に枡形虎口が構築され、隅には櫓台が残される。上の城（山城）と下の城の間には登り石垣があり、現在もその威容を残している。

炬口城（洲本市炬ノ口宮ノ上）

炬口は洲本城の対岸にある港津で、「兵庫北関入船納帳」には洲本よりも多くの船の記録があり、「南海流浪記」に僧道範阿闍梨が八木の宿館を訪れる前に訪れるなど、戦国時代以前は洲本よりも有力な港であったと思われる。

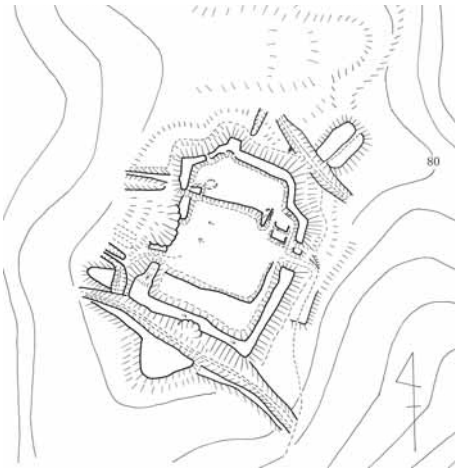

図 13　炬口城縄張図（山上雅弘作成）

大永 8 年（1528）炬口城の城主安宅次郎三郎が三好氏に謀反し、淡路の国衆蟇浦藤次・島田遠江守らによって城を追われた（同年 4 月 11 日「三好元長感状写」阿波国徴古雑抄）。これは永正 16 年（1519）に淡路守護細川尚春を滅ぼした三好氏に対する抵抗と見られる。

この抵抗から安宅氏には反三好方がいたこと、淡路守護滅亡以前から安宅氏の城郭ネットワークが島内にすでに存在していたことを教えてくれる。その後、安宅氏は長慶の次弟冬康が養子となることで、この城郭ネットワークを掌握し、三好氏の淡路支配に利用したと思われる。ただし、炬口は以後、洲本の陰に霞む存在となってゆく。

炬口城は洲本川の北岸、炬口八幡神社背後の標高 96m の山頂に築かれた。淡路島内に残される土の城としては最も発達した構造を持つ。主郭が方形を呈し、周囲を大規模な土塁が囲み、南北の両端を堀切で遮断する。東面の土塁開口部が虎口で、内部の東側に一段高い平坦面を配するが、東脇に先ほどの虎口から続く通路が確認される。土塁は 1.5m前後の高さを持ち、東北隅に櫓台状の膨らみを持つ。なお、南西隅周辺には畝状竪堀が確認される。

図 14　由良城の位置
（明治 19 年陸軍仮製図に加筆）

由良城（洲本市由良）

由良は 14 世紀の「兵庫北関入船納帳」において島内で最も多くの取扱高を誇った港である。由良城は戦国時代に安宅氏によって築かれたが、この時の城は由良市街の北背後にある「城山」（由良古城）とされる（高橋成計 1995）。その後、慶長 18 年に池田氏が築いた新城は海岸側の成山山頂とされる（図1）。ただし、新城があった成山は明治期に由良要塞の砲台が築かれたため、現在その遺構は確

図 15　由良古城縄張図
（山上雅弘作成）

認できない。わずかに周辺に瓦が散布することと（高田徹 1995）、海岸部に慶長期の矢穴痕跡を持つ石列が残されることなどに痕跡を見出すことができる（山上雅弘 1995）。その後、新城は蜂須賀藩時代の初期に淡路の拠点として存続するが、前述の通り由良引けと呼ばれる洲本城への移城が行われ廃城となった。

戦国時代とされる古城は由良市街の北端、標高45mの城山山頂にある。主郭は南北30m、東西 18m前後、北に続く曲輪は南北 25m×東西 15mほどの規模で間に低い段差を持つ。この二つの曲輪を中心として周囲に小規模な曲輪を配置する。西斜面には連続する帯曲輪状の平坦地があるが、開墾の影響もあって遺構の範囲は判然としない。いずれにしてもこの山城は由良の町に隣接して、町を掌握することを目的としていることが窺える。

慶長期の由良城は成山山頂に築かれ、その範囲は成山砲台にほぼ重なる。この範囲には広範囲に瓦が散布することから、城域は少なくとも南北 400mの範囲と推定される。平成 17年に行なわれた発掘調査で砲台の観測所と思われる小丘の盛土から大量の瓦片が出土した（山上　2005）。

叶堂城（南あわじ市松帆・古津路）

三原平野西端の港湾である湊は三原平野の河川が合流する河口に位置する。古代には国府の津（小川信 2001『中世都市「府中」の展開』）であったとされ、中世には「兵庫北関入船納帳」に登場する要港として知られる。叶堂の名称は築城以前にあった観音堂に由来するもので、観音堂は江戸時代に再び同地に戻されている。

淡路では文禄 4 年（1595）に志知城（南あわじ市志知）の加藤嘉明が伊予正木に転封となり、三原郡の大半が豊臣家蔵入地となった。これに伴って代官石川紀伊守、三宅丹波守らがこの地を預かり、志知城を廃して叶堂城を築いたとされる（『味地草』など）。しかし城の存続は短期間で、関ヶ原の合戦後には廃城となったとされ、未完成であった可能性が高い。

城跡は標高 9.5mの独立丘陵に主郭を配置する。城域は主郭を中心に南北 140m、東西 180mほどとされる。主郭の南・西辺には穴太積みの石垣が残されていた。しかし昭和 58 年（1983）に河川改修に伴う発掘調査が実施され、調査後解体され現観音寺の境内に石材が移築されている。

主郭周囲の石垣は南面と西面で構造が異なる。南面は最大高さ 8.5mで隅角部は隅石・角脇石とも長方形石材を選別したものが使用される。西面は残存部の高さが 4.8mで、隅角部がシノギ積みとなる。ソリはなく石垣の角度は 60 度前後と南面の石垣に比べ古式である。消滅したが叶堂城の石垣は淡路島内に残された織豊期の石垣として貴重なものであった（兵庫県教委 1992『叶堂城跡』）。

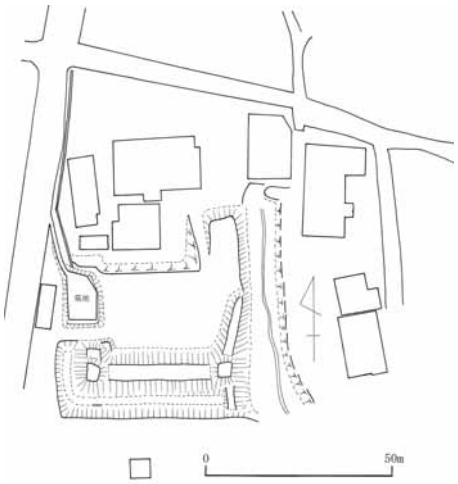

図 16　湊城縄張図（山上雅弘作成）

湊城（南あわじ市湊里）

湊の町背後の丘陵斜面に位置する、中世の湊にあった城である。織豊期に築かれた。叶堂城からは南側 300mにある。周囲を土塁・堀で囲む館城構造で、『淡路名所図会』（兵庫県立歴史博物館蔵）によれば内部は 3 区画され、南側を「奥城」と呼んだ。南側の土塁隅部の天端は方形に拡張されており、「天尊台」と呼ばれた

という。城主は安宅次郎（『味地草』他）といわれるが、近世史料には笠木主膳守や今井若狭守なども城主として伝わる（『湊里由来記』）。

鶴島城（南あわじ市福良）

福良は古代には南海道が設置される交通の要衝で、阿波との往来の玄関口として知られる。鶴島城はこの福良の湾口（標高 80m）に築かれた山城である。築城は寿永 3 年（1184）源平合戦に関係するとされるが、戦国時代の城史は伝わらない。

図 17　鶴島城縄張図（山上雅弘作成）

しかし、現在残される遺構は戦国時代のものである。ただ、天正 13 年（1585）3 月には羽柴秀長が、福良に人数を揃えて鳴門に渡り、阿波土佐泊に進出する（『四国御発向並北国御動座事』）など、この地が軍勢の集結地となっている点からみると、この時期には当城の存在は重要であったと思われる。

城跡は『福良浦分限絵図』の「古城・弦島山」の記載位置から遺構が確認できた。宮本誠二氏もかつてこの遺構を紹介している（宮本誠二 1995）。城跡は 2 つのピークを持ち両者を堀切で分断する。2 つのピークは東北側を行者山、西南側を弦島山と呼び、それぞれ郭群を構成する。構造は曲輪を階段状に並べた単純なものであるが、全体の規模からすると淡路島内の山城としては比較的大きい。ただ、鶴島城は福良湾内への眺望が効かないが、鳴門や土佐泊城への眺望には優れる。四国側の監視を目的とした海城と見られる。

沼島城（南あわじ市沼島）

沼島には沼島水軍を率いた梶原氏がいたとされる。沼島八幡神社には天文 2 年（1533）の梶原景節、天正 8 年（1580）の梶原秀景の棟札が残る。

図 18　沼島城の位置

城跡は沼島集落の北寄りの丘陵上（標高 16m）、現在の蓮光寺の境内にあった。この場所は南東から張り出した尾根の尖端に位置し、境内は南北30m、東西30mほどの規模で、集落北側を限る場所にあたる。城跡は寺院によって改変を受け遺構は残らないが、立地から見ると丘城構造が推測できる。また、城からは沼島の町を眺望できるが周囲の海上を見張るには適さない、集落に隣接した小規模城郭だったのだろう。

（4）淡路の城館概要

戦国時代に三好氏の権力を背景に淡路支配をおこなった安宅氏は地誌『味地草』などによれば「安宅八家衆」の城として由良・洲本・猪鼻・炬口・安乎・岩屋・三野畑（白巣城）・湊が記され、一族が分立したといわれている。この他、梶原氏が拠点とした沼島も安宅氏の配下にあったようである（中平景介 2020）。

猪鼻・安乎・三野畑は内陸にあるが、他の城郭はすべて重要な港津に立地する。由良と湊は 14 世紀の『兵庫北関入船納帳』によれば兵庫津への入船が島内の大多数を占めるなど、

海運交易ネットワークの要港であった。さらに、岩屋と由良は明石海峡、紀伊水道を扼する立地から畿内への航路を押さえる要港とされる。一方、洲本・炬口は畿内から島内への玄関口となる港で、特に洲本は戦国時代以降に島内の中心地となってゆく。さらに沼島は阿波や阿波と畿内を往来する船の中継港で、その役割は海上交通に密接に関わるものであった。

図 19　安平城・菅氏館の立地

このように安宅氏が拠点とした港津、海城は淡路の海運・海上交通を掌握する上で重要な拠点を独占するものであった。

一方、こういった主要な港津とは別に島内の中小の港津にも多くの海城が築かれた。遺構が確認出来るものでは東浦の佐野城、西浦の墓浦城・育波城・阿那賀城、島南部の阿万城などがあるが、いずれも小規模な海城である。

図 20　田村氏の拠点と郡家城

さらに、これらの海城とは異なって、海上勢力として活躍した武士の拠点が内陸にあった事例も見られる。安平城は安宅氏の城郭であるが浦から距離を置いた山間部に立地する。さらに、菅氏の居館とされる菅館は安平城よりさらに 2 kmほど内陸に入った場所にある。また、一宮神社の神官の系譜を持つ田村氏は海岸から 2 kmほど入った場所に拠点となる郡家城を築いている。このように海上活動を担う武士層にも、港津に隣接しない場所に拠点を築く例が島内には散見される。

以上の通り、島内には主要な港津に拠点的な海城を築く事例と、中小の港津に築かれた小規模な海城、さらに内陸に城郭を築く 3 種類の海城・城館が海上勢力を担う武士の拠点となっていた。いずれにしても、海上勢力と海城・城館との関わりを考える場合、淡路では主要港津の城郭と中小港津とは分離して検討する必要があるだろう。

ただ、こういった安宅氏を盟主とする海城の秩序も、冬康没後は徐々に様変わりしたと思われる。郡家の田村氏は南の都志氏を被官化し、天正 10 年の阿波一宮城攻めに従軍するが、このとき田村氏は独自の勢力として仙石久秀の軍勢に加わっている。また、田村氏は戦国時代後半に淡路島西浦に一定の勢力を伸張したようである。一方、東浦では安宅氏の傘下にあった菅氏が出自の山田原の菅館を始め、釜口の猪熊城を築城するなど東浦に勢力を伸張している。このように島内では群在した武士層の序列化が進行し、多くの海城も徐々に淘汰されたことが推測される。

そして、天正 9 年に秀吉が淡路の岩屋城を攻略し、続いて郡家城・志知城・洲本城を攻略して淡路を制圧した（奥野高廣 1985）。このとき、秀吉が攻略すべき城として上げた上記の 4 城が注目されるが、多くの城が既に軍事的な攻略の対象とならず、この時すでに中小港津の海城は機能を終えていたことが推測される。

3．さいごに

阿波・淡路の海域と海上勢力について述べてきたが、最後に四宮氏と安宅氏について見て

おきたい。四宮氏は撫養城の城主であるが、阿波国内では他に北泊城の城主のほか、椿泊周辺にも活動が知られる（中平景介　2021）。さらに、讃岐の引田城、備前の向日比城にも城主としての痕跡を辿る事ができる。山内譲氏によれば、向日比城の四宮氏は守護細川氏による港湾掌握のためにこの地に移って拠点を築いたという（『備前記』・山内譲 2011）。その後四宮氏は阿波や讃岐の引田では天正期頃まで存在が確認でき、その城館は細川氏の守護領国の主要港津にあり、阿波－讃岐東部－備中を結ぶ航路の主要港に位置する。その背景には守護権力を梃子にした港湾掌握が推測されるだろう。ただ阿波の南方にはこういった同族のネットワークはなく、それぞれ在地の領主が海城を築いており対照的である。

図 21　四宮氏・安宅氏の城郭

一方、淡路側でも安宅氏が島内の有力港津を占めた（『味地草』など）。安宅氏は南北朝時代に守護細川氏が阿波・淡路に給地を与え、海賊退治などを経て、由良に進出したとされる（兵庫県 1975）。その後、島内の有力港津を掌握してゆくことになる（兵庫県 1975）。つまり両氏は守護との関係を梃子に港津に影響力を持ち、海城を築城して、海運による権益や水軍の掌握を行なったことが推測される。そして、16 世紀前半に三好氏が台頭し守護家を滅ぼして、安宅氏の権益を簒奪し淡路を畿内進出の兵站基地とした。同時に天文期以降の三好氏は洲本城を拠点化することで島内の掌握をはかるなど、旧秩序の改変も進めたようである。

一方、阿波では畿内への玄関口である鳴門周辺に撫養城・土佐泊城・木津城が並立した状態で天正期まで維持される。これらを統合して撫養城に集約されるのは蜂須賀期に入った天正 13 年以降となる。そこには淡路に見られたような港津や海城の集約が行なわれた形跡はみられない。同じ三好氏の傘下にあって 2 国間には海城に関する掌握に違いが見られるようである。

(1)阿波の歴史的経緯は、徳島県教育委員会 2011 により略述し、必要な部分には別に参照を示した。

(2)阿波の城郭のうち、土佐泊城・撫養城・木津城・海部城の縄張図は本田昇 2015『全国城郭縄張図集成』より転載した。

(3)淡路の歴史的経緯は山本幸夫 1981 により略述し、必要な部分には別に参照を示した。

引用・参考文献

藤井容信・彰民 1825『淡路草』

小西友直・錦江 1857『味地草』

平野安澄 1792『淡路名所図会』兵庫県立歴史博物館蔵
奥野高廣 1985「織田・羽柴政権と淡路」『あわじ第 2 号　淡路地方史研究会会誌十八号』淡路地方史研究会
兵庫県 1975『兵庫県史』第 2 巻
兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園調査』
山内譲 1997『海賊と海城―瀬戸内の戦国史』平凡社
山内譲 2011『中世の港と海賊』法政大学出版局
天野忠幸 2014『三好長慶』ミネルバ書房
天野忠幸 2012「阿波三好氏の系譜と動向」『戦国大名と国衆 10　阿波三好氏』岩田書院
天野忠幸 2010『戦国期三好政権の研究』清水堂
天野忠幸 2021『三好一族』中央公論新社
徳島県教育委員会 2011『阿波の中世城館』
本田昇 2015『全国城郭縄張図集成』岩田書院
宇山孝人 2017「阿波九城の成立と終焉をめぐって」『史窓』47 号　徳島地方史研究会
山本幸夫 1981『日本城郭大系』第 12 巻
髙田徹 1995「脇坂・池田・蜂須賀領における淡路洲本城の変遷」『淡路洲本城』城郭談話会
小山文好 1995「安宅八家衆の城郭」『淡路洲本城』城郭談話会
宮本誠二 1995「中世城館遺構から見た淡路の権力構造」『洲本城跡』城郭談話会
小川信 2001『中世都市「府中」の展開』思文閣出版
兵庫県教育委員会 2005『由良城跡発掘調査実績報告書』
尾下成敏 2009「羽柴秀吉勢の淡路・阿波出兵-信長・秀吉の四国進出過程を巡って」『ヒストリア』214 号
徳島県教育委員会 2011『徳島県中世城館跡総合調査報告書　徳島県の中世城館』
浦上雅史 2016『歴史講演会　すもと松の内はこうして生まれた』城下町すもとまちづくり協議会
小川雄 2020『水軍と海賊の戦国史』平凡社
中平景介 2013「天正前後の阿波をめぐる政治情勢－三好存保の動向を中心に－」『戦国史研究』第 66 号
中平景介 2020「織田・毛利戦争と淡路」『駒澤史学』第 94 号
中平景介 2021「天正期阿波南方と地域権力」『地域社会と権力・生活文化』徳島地方史研究会
山上雅弘 1995「洲本城・由良城の発掘調査」『淡路洲本城』城郭談話会
山上雅弘 2019「淡路の港津と政治拠点」『港津と権力』中世都市研究会編　山川出版社
山上雅弘 2020「岩屋城天守と大坂の陣」『城郭研究室年報』VOL.29 姫路市立城郭研究室
石井伸夫 2018-ａ「日和佐城」『三好一族と阿波の城館』石井伸夫・重見髙博編　戎光祥出版
石井伸夫 2018-ｂ「海部の海城群」『三好一族と阿波の城館』石井伸夫・重見髙博編　戎光祥出版
石井伸夫 2021-ｂ「中世後期の阿波における港津の簇生と「海城」の展開」『地域社会と権力・生活文化』徳島地方史研究会編　和泉書院
石井伸夫 2022「中近世阿波国における「海城」の立地とその機能」『中四国中世城館論集Ⅳ』